

信仰の元一日を伝える努力を



「こどもおぼがえり」は中止になったが、夏休みを利用しておぼがえりに帰り、ひのきしんを実施する教会も。(神殿西側に設置された「夏休みこどもひのきしんセンター」前で)

真 朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

元一日の日を以て入りの心生涯の
理変わらねば、何も言う事は無い。

明治31年10月16日

正面四方

『みちのとも』8月号に、おふでさきの背景についての記述があった。当時、世界ではどのような動きがあったのかを見ると、

特筆すべきは18

この道に入った信仰初代たちは、おたすけにいただいた感激を胸に、人だすけに励んできました。しかし、その感激も代を重ねていくにつれ薄れてしまい、ついには信仰が伝わらず、道から離れてしまう家庭も少なくありません。陽気ぐらしへの末代続く道を歩んでいくためには、信仰の元一日やたすけられた喜びをわが子にしっかりと伝えなければなりません。

17歳になって初席を運ぶ際に、わが家の入信の動機を伝える。節をお見せいただいたときに、初代のたすかった話、おたすけ話などを聞かせる。春秋の霊祭で、初代の入信を振り返る。信仰の元を伝える機会はいろいろあるでしょう。

元を知ることは、自らのいんねんの自覚に繋がります。いんねんを自覚すれば、人生を左右するような大節に遭遇したときも、その中から親神様の思召を見出し、喜びの種を見つけることができるでしょう。

小さい頃からスマートフォンやタブレットを使いこなし、たくさんさんの情報を得ることができても、わが家の信仰の元一日、たすけ一条の喜びをわが子に伝えられるのは親だけなのです。

59年、チャールズ・ダーウィンが「種の起源」を著したこと。人類史上初めて、生物の自然選択による進化発展を論理的・科学的に説き明かした。いわゆる「進化論」である。ダーウィンはこれにより、結果的に神の不要を証明してしまうことになり、世界に冠たる教団が反論した。「われわれの先祖が猿であるわけがない」と。

教祖は「月日のやしろ」でいらつしやる。このような世界の動きを背景とした中で、おふでさき、また十四年本、十六年本といわれる「こふき本」を通して元の理を発せられた。しかし世界はまだこのことに気付いていない。それもそのはず、われわれがよくが、まだこの教えを伝え切れていないのだから。(真)

《7月次祭 挨拶》

親子で同じ時間を過ごし 信仰の喜びを伝えよう

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日頃は旬の御用の上にご丹精いただきまして、誠に苦勞様でございます。

さて、東京オリンピックは開幕しましたが、「こどもおちばがえり」はコロナ禍の現況を鑑みて、今年も中止になりました。夏は子弟育成の絶好の季節であることを思うと、こどもおちばがえりが担ってきた役割の大きさを改めて実感しているところです。こどもおちばがえりをはじめ、さまざまな少年会活動の中止や縮小によって、縦の伝道の責任は各教会や家庭に委ねられていると思います。

夏休みは、親と子が一緒に過ごす時間を普段よりつくることができる期間ですが、近年は親子で過ごす時間が減ってきているように感じます。その原因は両親の仕事の都合、子供の習い事などで在宅時間が短いことや、スマホやゲームに時間を費やすという現代社会の習慣も大きな要因であると考えられます。

家庭でのコミュニケーションが不足すると、家庭内で問題が生じるだけでなく、子供が社会に出てから、人間関係がうまく築けない、人との立ち回りがうまくできないなどのコミュニケーション障害に陥ることがあるともいわれています。家族の中で、今日

あった出来事や何気ない話題について会話をすることを心掛けるだけで、親子の関係は良好になるわけです。

そこで夏休みの時期を利用して、わが子に信仰の元一日と、代頂いている御守護と喜びを聞かせてみてはどうでしょう。子供にとっては、「なぜ自分は天理教を信仰している家庭に生まれたのか」という素朴な疑問の答えがそこにあります。

私自身は小さい頃から、志まへ祖母から梅治郎初代様の入信のいきさつや、井筒家のいんねんと信仰、また眞明組のことなど、度々と聞かせてもらいました。そのおかげで、会長になった25歳の頃には、信仰の元一日は心に治めることができていましたし、いんねんもはつきりと自覚できていたように思います。そして何よりも、天理教の信仰に誇りを持てるようになったことが有り難いことでした。

子供が家の信仰の元一日を聞いても、すぐにどう変わるというものではないかもしれません。しかし、それが心のどこかに刻まれているれば、成人したときに必ず信仰生活に生きてくるように思えてなりません。親子の間で信仰の元一日を語る機会を持つことを、ぜひお考えいただきたいと思います。

ひのきしんで親子ともども徳積みを

今年もこどもおちばがえりが中止になったことを受けて、少年会本部から「夏休みこどもひのきしん」が新たに提唱されました。これは、教会や家庭において、日頃の御守護に感謝し、楽しみながらひのきしんを実行して、大人も子供も共に成人する機会にさせてもらおうということです。

ところで、メジャーリーグで大活躍している大谷翔平選手が、

試合中にゴミを拾ったことを称賛する記事が、以前紹介されていきました。こうしたことは今に始まったのではなく、日本ハムにいた頃にも「ゴミを拾うことは人が捨てた運を拾うことだ」と言って、率先してグラウンドのゴミ拾いをしていたようです。さらに遡れば、高校生のときから、運を高めるために必要な目標としてゴミ拾いや挨拶の励行、道具を大切に扱うなどを徹底して、これを現在も素直に継続しているわけです。こうしたことが大谷選手の成長と今の成功の陰にあるのです。

また、2016年のリオ五輪柔道金メダリストの大野将平選手が、万全の体調で大会を迎えるための陰の徳積みにと、毎日ゴミ拾いや掃除を実行していたことはよく知られた話です。

私たちの先人は、ゴミ拾いや掃除は神様の身体をきれいにするのだと口々に言っていて、御恩報じの心でひのきしんに励まれました。ゴミを一つ拾うことは小さな行いかもしれませんが、これを続ければ確かな徳積みになるのです。この夏は「夏休みこどもひのきしん」の提唱に乗り、親子で徳積みをさせていただくのも、縦の伝道の有用な手立ての一つだと思えます。

夏は子弟育成、縦の伝道の季節です。お道の信仰を基軸とした良好な親子関係、良好な家庭環境を築く絶好の時期です。家庭内での会話を増やし、同じ時間を過ごすことを心掛けて、そうした中で信仰の喜びを伝える努力を惜しむことなく、縦の伝道に励ませていただきたいと思います。

暑さ厳しい中ですが、お互い心は明るく勇んで、そしてともに元気に時旬の御用につとめ励ませていただきますように。

(要約)

立教百八十四年 七月 月次祭 祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長 井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には世界一れつをたすけ上げたいとの切なる親心から、日々を十全の守護にお護り頂き、常に温かく時には厳しく叱咤激励を下さいます。成人の道をお連れ通り下さいます親心の程は、誠に有り難き次第でございます。私共は、お見せ頂く事柄の中に親心を悟り、ほこりを払い心の成人に努めて、時旬の御用に勤しみ励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日はおちばより当大教会にお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目に与かる者一同、心を揃え、座りづとめ、陽氣てをどりを勇んで勤めて、七月の月次祭を執り行わせて頂きます。

御前には、折柄の暑さも厭わず参らせて頂きました芦津の道の子達が、日頃賜る御恵みに御礼申し上げ、共に人々のたすかりと世の治まりを祈念する状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。更にはおたすけに励む教会長、ようぼくの真実をお受け取り下さいます。不思議自由の理をお垂れ下さいますようお願い申し上げます。

私共をはじめ芦津に繋がる教会長、ようぼくは、改めて信仰の元一日に思いを致し、親々の道を振り返り、各々はこの道にお引き寄せ頂いた喜びと教祖の道具衆としての自覚を高めて、たすけ一条に真実を尽くし、一れつ兄弟姉妹としてのたすけ合いの実践に心勇んで励ませて頂く所存でございます。

何卒、親神様には、皆の誠の心をお受け取り下さいます。陽氣ぐらし世界の実現に向かって、一手一つに心勇んで働かせて頂きますよう御守護の程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《7月月次祭 神殿講話》

初代の信仰を振り返り 御恩報じの実践を

役員 奥田眞治

今年は、眞明組講名拝戴140周年の節目の年である上から、先人先輩の信仰を思い浮かべ、「感謝と報恩」の心で通ろうと申し合わせております。

親々の信仰を受け継いで、深めていくことが成人への努力の姿であります。この機会に信仰初代のことに触れて、感謝の気持ちを新たにしたいと思います。

豊野分教会の元一日

私どもの教会は明治42年1月10日の設立です。奥田家の信仰は明治38年、祖父・奥田市三の母である奥田遊丈の入信に始まります。

曾祖母は夫の出直し後、神経痛並びに癩（胃けいれん）が時々起

危険を目の当たりにし、祖父は遂に信仰を決意し、親神様にお頼りしたところ、2日間で鮮やかな御守護を頂いたのです。

この子供は、実はその年の6月25日に出直しておりますが、こういう話が残っております。

あるとき、他系統で20年近く信仰している人が、孫の身上からおたすけを願いに来られ、曾祖母がおたすけに行きましたが、ある日門前から「天理教を信仰しているも死ぬ。子供も死ぬんやなあ」と陰口が聞こえてきました。祖父もその子供のことを心に懸けていたので、家に様子を見に行くと、医者

が匙を投げて帰ってしまったところで、息も絶え絶えでした。

幸いにも、大和より岡島先生が来ておられたので、すぐに呼びに帰り、おさづけを取り次いでいただきました。この時祖父は、「信仰の浅い自分を省みると、人をたすける徳も力もない。親神様にお頼りするより他に道はない」と思い詰め、できる限りの真実を捧げよ

うと、瀕死の容態の子供におさづけを取り次いでおられる岡島先生の後ろから、「自分の子供を身代わりにしますので、どうぞおたすけください」と心を定めました。すると、おさづけが終わるか終わらないかのうちに、子供の様子は一変し、やがて1週間で鮮やかな御守護を頂きました。それから2カ月後、わが子はどこが悪いということもなく、母親の背中で静かに出直してしました。

この節から、祖父は神意の深さを悟るとともに、道一条の心を定め、にをいがけに、おたすけに努めました。

わが子の出直しは誠に悲しく寂しいものですが、教祖のご足跡を少しでも通らせていただいたことが何よりも救いであり、こうした不思議な親神様の理詰めの世界に信仰を深めていきました。この節から約半年後の明治41年12月、祖父はおさづけの理を拝戴し、そのわずか1カ月後には豊野宣教所を設立しました。

私財一切を納消

明治42年の暮れ、大教会二代會長・井筒五三郎様が突然来訪されました。それは、当時の詰所隣接地の購入及び増築の問題と併せて、奥田家の大教会入り込みの相談でした。信仰を始めてまだ日の浅い祖父にとっては予期せぬ重大問題で、即答のできるような事柄ではありません。

教理も極めておらず、会長になって1年にもならず、名称の理の責任を思う時、一度は辞退しましたが、二代會長様の真実に溢れる、

情理を尽くした説得に対して衷心より感動し、お言葉に沿わせていただく心を定めました。

明治43年2月、祖父は田畑や、みかん山、竹林など私財一切を納消し、大教会役員として芦津大教会に入り込み、同時に詰所詰めとなりました。難航していた詰所の増築はこのことがきっかけで、5カ月足らずの期間に竣工しました。

五三郎先生の生い立ち

年の暮れに二代會長様が突然わが家に来訪された様子やお話しぶりは、どうだったのでしょうか。

わが家には、はっきりとした記録が残っていないのですが、二代會長様のことを詳しく知ることによって、ある程度の想像はできるのではないかと思います。高安におられた頃に遡^{さかのぼ}って思案してみたいと思います。

松村五三郎様は、明治7年10月13日、父・松村栄治郎様、母・さく様の三男としてお生まれになりました。さく様は平等寺村の小東

家のお出で、教祖の御長男・中山秀司様のもとに嫁がれたまつゑ様の姉に当たる方です。明治2年に妹のまつゑ様が、神の「なかだち」により中山家に嫁がれる際、さく様は同行して初めて教祖のもとへあがり、お屋敷と松村家との関係はここから始まっています。

松村家の入信は明治3年秋、さく様が数え25歳のときですから、五三郎様は信仰篤^{あつ}い家庭でお生まれになりました。

五三郎様が実際に信仰を始めたのは明治22年、16歳のときに激しい痔を患い、さく様から親神様のお話を聞き、不思議な御守護を頂いて、将来はたすけ一条に進む心を定めたという話が伝えられています。翌年、17歳でおさづけの理を戴かれました。

淡路布教へ

明治25年11月15日、高安初代・松村吉太郎先生の命により、五三郎様は19歳の身で淡路の地に単独布教に出られました。布教道中は

まさにどん底で、雪平鍋一つだけ持参し、それでお粥^{かゆ}を炊いて過ごされ、不案内な山路を歩き回られました。半年間は、誰も話を聞いてくれる者はいませんでした。

初めてお話を聞かれた方が山中利平という方で、全身にイボができる奇病でしたが、おさづけを取り次ぐと、全身からイボが黒豆のようにポロポロと剥^はがれ落ち、その方は五三郎先生に縋^{すが}りつき、声を上げて泣いたそうです。

明治26年夏、淡路で赤痢が流行したときは、真夜中に警戒線乗り越えておたすけに奔走され、一夜の間に50戸の人々が入信したと伝えられています。またある家では気の間違いがたすかり、そのお供えで、後の出張所となる家屋を買い求めることができました。

淡路島は周囲が約143キロメートルありますが、島内に足跡の印されないところはないといわれるほどの熱烈な布教は、至るところに不思議なたすけとなって現れ、道が伸びていきました。



上級への伏せ込み

明治27年11月5日、布教に出られてからわずか2年で、洲本出張所（後の洲本大教会）の名称の理を戴かれました。布教活動は順風満帆のように見受けられますが、非常に苦労を重ねておられます。

その頃は、いつも心の奥底で上級の高安分教会の苦しい会計事情に心を寄せておられました。当時の高安は、教会の移転建築等で非常な苦心をしておられました。こんな時にこそ理を運ばせていたいただきたいという思いは、念頭から離れなかったようです。

洲本出張所の開筵式かいえんしきにあたり、五三郎様が「普請でもせねば狭いだろう」と言われると、信者たちは普請と聞いてなおさら勇み立ち、すぐに喜納金が集まりました。

五三郎様は神殿普請の願書を持って上級である高安へと向かわれました。ところが到着すると、高安もこれから普請をするということとを聞かれ、用意していた木材購

入のお金を全てお供えされました。さらに、2回目の普請金も材木を購入せずに、高安へ全てお供えされました。そして、とうとう3

回目が集まった喜納金も、誰にも語らず上級へと運ばれたのでした。

明治29年の正月を迎えますが、洲本の普請の材木はいつまで待っても届かない。信者たちからは、「使い込んでしまったんじゃないか」と疑いの目で見られるようになり、やがて不満の声が噴き出しました。

五三郎様は困り果てた揚げ句、意気消沈の姿でひそかに四国の撫養に渡られ、同年輩の石川金蔵氏（高安部属北阿支教会初代）の元に身を寄せて、今後について相談しました。ちょうどそこへ布教中の村川嘉吉氏（高安部属北淡分教会初代）が突然やって来て、共に

苦境を語り合い、勇気づけ合って「命懸けでやろう」と水盃で乾杯をしたといえます。

毎夜遅くまで3人が語り合うのを不思議に思っ、石川氏の隣家

の奥さんが詳細を尋ねてきたので事情を話すと、「実は私の知り合いで、普請のために材木を買ったものの、事情があつて中止し、2、3年そのままになっています。虫が食っているかもしれません、それでよければ相談しましょう。5円のお金と酒3升を用意してください」とのことでした。

早速、五三郎様はお金とお酒を用意して材木を買い受け、ようやく福良港へ運ぶことができました。信者たちは大いに喜んで、勇ましく洲本まで運んだそうです。

五三郎様は「全く神様という大問屋だから、材木をどこに置いてくださっているか分からない」と言われ、不思議な御守護を頂いて普請にかかりました。

たすけふしぎふしん

このとき不思議なおたすけがありました。福良の布教師である井上政三郎氏は、福良港に着いた五三郎様の顔を見るなり、「もう少し早かったら、おたすけに行ってい

ただくのやったが。田中岸蔵さんとこの子供が重態で、なかなか難しい」との話でした。五三郎様はすぐに田中家におたすけに赴かれましたが、今しがた息を引き取ったとのことでした。

五三郎様は顔にかけてある白い布を取って、すぐさま神前に額突き、真剣に願をかけ、息絶えた子供に懸命におさづけを取り次がれました。けれども息を吹き返してこない。茶の間に皆を寄せてお道の話の説き、再びおさづけを取り次ぎました。それでも蘇生しない。そこで、「このまま御守護を貰えば神様に御恩をお返しするか」と強く心定めを促されました。

そして、3度目のおさづけを取り次ぐと、不思議にも子供が蘇生したのです。一同の感激は言うまでもなく、父親の岸蔵は感激の涙にむせびつつ、今後の信仰を誓われました。田中家はそのとき、蔵の普請中でしたが、そのまま神様の御用に差し出され、神殿の工事に先立って蔵ができたのは縁起が

会長室報

女子青年勤務

【詰所会長宅】

加世田もとよ（大 島）

立教184年7月13日

教務部報

教人登録

段野 渉（大 清）

立教184年7月1日

修養科第959期修了

井筒さちえ（直 轄）

浜田 慶郎（直 轄）

立教184年7月27日

おさづけの理拝戴《6月》

當島 孝人（芦大熊）

平井 心（二 名）

黒原 千聖（紀 内）

〔拝戴順 3名〕

初席《6月》

〔1名〕島新・東大屋

〔順序運びより 2名〕

行事中止のお知らせ

新型コロナウイルス感染症

拡大防止のため、左記の行事が中止となりました。

〔本部〕

第96回天理教青年会総会

10月27日

〔大教会〕

芦津道の後継者の集いⅡ

第1次 9月18日～19日

※第2次（10月2日～3日）、

第3次（11月27日～28日）

は開催予定です。

会長の思いを感じる努力を

青年会オンラインセミナー

7月31日、青年会芦津分会

（井筒敏成委員長）は、「おた

すけ最前線 三男としての通

り方」をテーマに、第3回オ

ンラインセミナーを開催、17

名が参加した。

講師の合田慶三郎氏（川之

江部属・愛野分教会）は、教

会の三男として生まれ、現在

は会長である兄をサポートし、

教会が運営するファミリーホ

ームの管理者として、夫婦で

住み込みながら、里子の養育

にあたっている。

合田氏は、「教会の御用を行

眞明組講名拝戴 140 周年記念

〈秋季大祭〉

10月23日(土) 午前10時30分

神殿講話：内統領 宮森与一郎先生

対象：在籍者、教会長夫妻、後継者
※1教会につき、必ず1人以上の参拝者を

〈おぢば帰り〉

10月24日(日) 午前11時

本部神殿で拍子木を入れておつとめ

南礼拝場以外に分散して昇殿してください
神苑のパイプ椅子もご利用ください

う上で大切にしていることは、
会長の思いを常を感じる努力
をすること」とし、夫婦で行
っている車中泊布教での体験
などを話された。その上で参

加者に対し、「今、少しでもや
りたいと思っていることがあ
れば、失敗を恐れずぜひ挑戦
してください」と、行動を促
された。

月例統計（自令和3年1月1日～至令和3年6月30日）

項 目	初	の	修	教
名 称	席	お	養	人
() 内教会数		理	科	
大 教 会 (1)	9	3		
東 津 (13)	4	2	2	2
吉 野 川 (29)		1		
島 原 (17)	2	5		
日 方 (15)	2	4		
稗 島 (8)	1	2	2	
本 津 (2)				
日 高 (2)				
始 良 (5)				
津 和 (13)				1
門 司 (6)				1
當 別 (6)				
大 島 (27)	4	6	6	
沖 縄 (3)				
尼 崎 (2)		2		
四 ツ 山 (5)			1	1
大 冠 (2)				
島 下 (1)				
保 山 (3)	1			
青 木 (1)				
芦 浪 (1)		1		
甲 邊 (1)				
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)	3			
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵庫眞洲 (1)	1			
芦 ノ 郷 (2)				
本 明 勇 (2)				
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)		1		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)		1		
眞明彰化 (2)				
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (213)	27	28	11	5